

月刊

いじろのとも

第九卷

五月号

目に見えぬもの

顔にある

この目ではなく

心眼や

法眼という

目に見えぬ

こころのまなこ

磨くなら

見えないものが

見えてくる

ぼんくらばかり

世の中の人

法の光で

照らしてみれば

どいつもこいつも

ぼんくらばかり

(ソクラテス)

人生を考え直して

みたい人は（五三）

『聖書』解説（二九）

マタイ福音書の第七章を続けます。

- 一五 にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊なりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。
- 一六 あなたがたは、実（み）によって彼らを見分けることができます。ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。
- 一七 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。
- 一八 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。
- 一九 良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。
- 二〇 こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。

これらの部分は、にせ預言者とその見分け方が主題になっています。

ところで、宗教では、教祖（信仰の対象）、とその教え、とそれを布教する者、とが大切になります。仏教では、それらを仏法僧の三宝と呼んでいます。ここでいう、預言者は、仏教で言えば「僧」で、キリスト教では、イエス・キリストの教えを説く者・布教する者ということになります。ですから、それは、教会の教師、あるいは牧師と言えます。

ここで取り上げている節は、その預言者の中に、にせの預言者がいるので、気を付けなさいということです。彼らは、外面はおとなしく、慎ましやかな、羊のような振りをしていても、心のうちは、凶暴で、貪欲な、狼だからなのです。

日本でも、こうした例は幾らでもあります。皆さんも、誰でもが思い当たる事件があったことを思い出されると思えます。

私も、そうした、宗教に関してマスコミなどで話題にのぼった人たちの書いた本を、古本屋さんで、百円（以下）のものに限って買ってきます。書庫には、そうした本がもう一つの書架では足りないほどに達しています。そんな中で、話題にのぼった宗教人の場合には、特に関

心をもつて読んでみます。でも、これまで、新宗教と言わず、旧来の伝統宗教も含めて、ほとんどが上の例に該当するように思えるのです。

それを見分ける方法ですが、ここにもありますようにそれは、「実によつて彼らを見分けることができます」ということです。

では、実とは何でしょうか。

例えば、ある宗教団体は、病院を経営したり、共同作業所を作つて人々の働く場を提供していたりして、人々の福祉に尽くしているように見えますが、でも、もう一方では、その同じ宗教団体が、どんな宗教も禁じている「殺人」や「暴力行為」を行つたり、教団や教祖の利得や名誉・権力の「貪欲な追求」に奔走したりしているのです。あるいは、どの宗教もが「悪を為さず、善を為すべきこと、あるいは、他者に愛を捧げること」をうたつていますが、でも、そうしているとはとても思えないことを為していたりします。

でも、もつと大切なことは、その教えを説いている宗教団体の長なり、教祖なりが、果して「解脱の境地に達しているか」あるいは「悟りを開いているか」どうかです。まだ、私は、現在、生きていて解脱に達していると思える人に、不幸にして一人も出会っていません。それ

は、実際に会うという意味だけではなく、書物や話を通じてでもです。

では、それは何によつて判断できるのででしょうか。やはりそれは、彼らのならせる「実」なのです。

「ぶどうは、いばらからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。／＼七 同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。／＼八 良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。」

ここで述べていますように、良い木は良い実を結び、悪い実をならせることはできないのです。つまり、解脱した人は、善を為し、決して悪いことや間違つたことはしません。そこが、私たちの判断の素材になるのです。でも、そうした人が書いたり言つたことが、間違いなのかどうか、善なのか悪なのかは、実は、解脱した人でなければ分からないことが、あるのです。そこが、人間にとつて悲しいところと言えます。「老子」は、第四十一章で次のように述べています。

「『上土』と呼べる立派な人は、『道』を聞けば勤めて実行します。『中土』と呼べる人は、『道』を聞いても半信半疑です。『下土』と呼べる人は、『道』を聞く」と馬鹿にして大笑いをします。でも、こうした人に笑わ

れないようでは、『道』とは言えないのです。」

なお、これは、本誌の平成六年十一月号（第五卷十一号）で取り上げています。ご参照いただければ幸いです。

この老子の言葉にもありますように、道を説く真実の言葉は、多くの場合は大笑いの種になるものなのです。老子が活躍した紀元前五世紀に較べますと、現在の人たちは、ずっと自己への執着が強まって、ますます、下士と呼べるような人が多くなっています。ですから、このことは、なおさらのことなのです。

つまり、にせ預言者を、真の預言者から区別する判断が、いま、きわめて困難になって来ているのです。私は、老子、釈尊、ソクラテス、キリストを歴史的に先駆をなしているという意味で四聖と呼び、真の預言者としているのですが、しかし、こうした四聖のような人を信じ、敬う精神は、日本人では、現在ますます失われてきています。それは、こうした四聖ではなく、街にあふれるにせの宗教者を、高学歴のエリートと言える人たちが、易々と信じる姿を見ていると、よく分かります。

もう一つ、にせ預言者を見分けるのに、有効な視点があります。それは、すでに見ましたように、「良い木は悪い実をならせない」ということです。宗教者が書いたり、語ったりすることに、万のうちの一つでも二つ

でも、間違いや悪があってはならない、ということ。

もし、ありますと、それは、実は、良い木ではなく、悪い木に悪い実がなったということになるのです。

それは、例えば書いたものと、そんなことは、書くはずがないと思えることを、とくとくと書いているということなのです。それは、読めば考えなくてもすぐに分かることなのです。

さて、一九節の「良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。」という部分ですが、なかなか厳しいものを含んでいます。

誰によって切り倒され、誰によって火に投げ込まれるのか、不明ですが、私は、それは「宇宙根源の原理」としておきたいと思います。抽象的ですが、結果としては、歴史の審判に現れることだと思います。

いま、現代人は、前にも触れましたように、四聖を信じるのが出来なくなっています。つまり、信じる対象が、にせの預言者ばかりになって来ているということなのです。そうなりますと、歴史の審判は、人類の滅亡をもたらすのだと思います。段々と地球上に悪が累積していつているように感じます。少なくとも、私の周辺ではそうなっているように思えるのです。

四聖の教えを信じ、則って生きて行きたいと思えます。

自作詩短歌等選

民主主義とは

今の世の

民主主義とは

そんなもの

今日の英雄

明日死刑囚

今の世の

民主主義とは

そんなもの

手本となる人

消え失せていく

今の世の

民主主義とは

そんなもの

子どもも親も

同等対等

今の世の

民主主義とは

そんなもの

教師も生徒も

同等対等

今の世の

民主主義とは

そんなもの

凡も聖も

同等対等

今の世の

民主主義とは

そんなもの

過去の伝統

捨てられていく

今の世の

民主主義とは

そんなもの

規範の意識

薄らいでいく

今の世の

民主主義とは

そんなもの

時間が消えて

刹那となりぬ

今の世の

民主主義とは

そんなもの

善と悪とが

無差別となる

(相対となる)

今の世の

民主主義とは

そんなもの

信という字が

死語となり行く

今の世の

民主主義とは

そんなもの

性・食・優への

執らわれ増える

今の世の

民主主義とは

そんなもの

損得好嫌が

第一となる

今の世の

民主主義とは

そんなもの

人の霊性

消え失せていく

こころの個人差

あたまでは

そんなに差のない

大学生

でもころには

天地の差

自分のことで

いっぱいの子

ひとのことに

配慮できる子

義理も人情もない

義理でつながる

欧米人

人情でつながる

日本人

でも

いま日本では

義理も人情も

なくなっている

自分棚上げ

自らが

悪を犯して

おきながら

すべて棚上げ

他人を裁く

支持の多さ

民主主義

人の偉さが

他者からの

支持の多さに

依存している

虚仮と仏真

聖徳太子のことは

世間虚仮

唯仏是真

いま大切に

されているのは

虚仮ばかり

仏も真も

かえりみられない

子どもの仏性を信じる

響育は

一人ひとりの

子どもがよい子だ

と信じていることから

始まる

それは

子どもの

仏性を信じる

ということ

そのとき

真のコミュニケーション

が

始まる

自作随筆選

神を信じる米の若者

五月四日(月)の毎日新聞に、「意外に保守的 米の若者 『神信じる』 94%」という見出しの記事が載りました。

ニューヨーク・タイムズ紙とCBSテレビの合同で行った、全米の13〜17歳の若者1048人を対象にした調査で、いろいろと明らかになった、目につく結果を紹介していました。

その中で、私の興味を引いたのは、彼ら回答者のほぼ半数が婚前交渉や同性愛を「良くない」と考え、94%が神の存在を信じており、最も尊敬する人としては、女子の44%と男子の18%が母親、男子の26%と女子の8%が父親をあげている、といった点でした。

先月号に、「心の教育中間報告」と題する随筆を載せ、その中で、日本の高校生が、親や先生に反抗したり、学校をずる休みすること、あるいは、売春など性を売り物することなどの傾向が、他の国に較べて飛び抜けて高いことを紹介しました。

今回の記事も、同様の傾向を示すもので、とても興味深いものです。

アメリカの若者が、神を信じていることは、私のゼミを取っている学部生が、昨年アメリカに半年余り留学したときの話で知っていました。それは、アメリカの友達から「あなたの宗教は何ですか、何を信じて生きているのですか」という質問を受けたとき、「別に特定の宗教を信じてはいない」と答えてびっくりされ、「よくそれで生きていけるなあ」と言われてしまった、という経験を聞いていたからです。アメリカの若者は、新聞報道の通り、決まって神を信じているようです。

それは、親がそうだということですが。アメリカでは、裁判のとき、聖書に手を置いて、神に対して宣誓をしますが、それは、こうした信仰があつてはじめて意味がある行為だと言えます。日本でも宣誓はありますが、それは神ではなく、法で処罰されるから嘘をつかないと宣誓するだけで、宣誓のもつ意味は全く異なっているように思われます。

日本も、「神国日本」の復活をおそれるあまり、「あつものにこりて、なますをふく」の愚かさを排し、宗教を死者の供養にのみ限定することなく、真に生きる支えとなるものへと、再生して行かなければなりません。

釈尊のごとば（六八）

法句経解説

第一章 汚れ

（二三五）汝はいまや枯葉のようなものである。閻魔（えんま）王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。しかし、汝には旅の資糧さえも存在しない。

（二三六）だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れを払い、罪過（つみとが）がなければ、天の尊い処に至るであろう。

「汝はいまや枯葉のようなものである」とは、厳しいことばです。しかし、これは、何も病人や老人が、今まさに死にかかっている、ということをもってしているわけではありません。人間は、あらゆる人が、何時でも「枯葉のようなもの」なのです。そういうはかない存在だということなのです。よく学生に、人間が生きるとはどういうことかを話すとき言うことなのですが、人間は今日一日生きれば、それだけ生きる可能性の一日を失ったことになる、つまり、一日生きれば、一日死んだことになる、

のだと言っているのです。大多数の学生は、そんなことを聞いたことがないと言っています。理屈では納得しても、自分の体験としてはピンとこないようです。

この一日の生死の単位を、どんどん短く縮めて行けば、インドでの時間の最小単位である「刹那」ということになります。仏教では「刹那に生きて、刹那に死ぬ」「刹那に生死（しょうじ）を繰り返している」と言いますが、それは、以上のようなことを言っているのです。ですから、人は誰でもが、「枯葉のようなもの」で、死は何時やってくるかも、不思議ではないのです。偈にありますように、「閻魔（えんま）王の従卒もまた汝に近づいた。汝はいま死出の門路に立っている。」ということになるのです。

でも、多くの人は、それを他人事のように思っています。日常に流され、そこに埋没して暮らしているのです。でも、老衰には至らず、まだ元気だと思っているのに、ガンなどの病気をしたりして、医師から死が間近に迫って来ていることを宣告されたりしますと、はじめて、死の恐怖におののきます。そして、それを受け入れようと必死に闘うことになるのです。そうするなかでも、多くの人は、自らのいのちを諦め切れず、人生のはかなさを嘆きながら、やがて死んで行くのです。なんと悲しいことでしょうか。もう少しましな生き方（それはまさに、

死に方でもありませんが)はないのでしょうか。

それが可能なことを、次の(二三六)の偈が示してくれています。

そのためには、「自己のよりどころをつくれ」と言いなくなるのです。では、自己のよりどころとは、何のことなのでしょうか。

釈尊は臨終に先立って、「自灯明(＝自帰依)、法灯(＝法帰依)」とおっしゃったとされています。「よりどころ」とは、ここにいう自分と、法であると言えます。

私の理論で言いますと、それは、自己と他己ということになります。自己と他己のバランスをとること、統合すること、よりどころをつくることのできるのです。

そのためには、誰にでも常に死は迫っているわけですから「すみやかに努め」なければなりません。そして、努めるものが何であるのかについて、「賢明で」なければならぬのです。

それは、「汚れを払い、罪過を無くする」ということです。では、汚れを払うにはどうすればよいのでしょうか。

私たち、普通、意識して行動しています。夢遊病者でないかぎり、つねに何かある目的をもって行動しますが、その行動が、もし、失敗すれば反省して同じ過ちを犯さ

ないようにしようとはします。

しかし、実は、人間はいくら反省し、悔い改めてみても、悲しいかな、また、同じ過ちを犯してしまいます。

意識でいくら、反省しても、ダメなのです。つきつめていけば、精神には神が宿っているのに、肉体には悪魔が宿っていて、その悪魔が悪をなさせるということになるのです。

なぜなのか。それは、汚れを払っていないからなのです。では、汚れは、どこに付いているのでしょうか。

私の理論で言いますと、それは、自分への執着という垢なのです。「自己」の「ずい(無意識領域)」に宿っている「生命蔵識(煩惱)」の働きが強くなり過ぎていくのです。私は、それを「この垢」とよく言っています。垢が付きますと、意識水準では、他者(絶対他者を含む)を求めたり、愛するところが麻痺してしまうことに現れてきます。

では、無意識水準では、垢が付くとは、どういうことなのでしょうか。無意識(深層心理・潜在意識)のことですので、反省して意識したり、自覚したりするわけにはいきません。自分の体験を基にして、理論を作って理解するだけなのです。私ですと、ヨーガと真言密教の宗教的体験と、自閉症児との出会いとその科学的研究をし

た体験と、から無意識の構造を意識の構造と一体化させて創出する、ということになるのです。ですから、本当は、私と同じ体験（特に宗教的体験）を追体験できなければ理解できないということになります。ということは、私の理論が真実だと、ただ、信じて頂くだけということになります。

では、その構造はと言いますと、それは、前述の「自己」の「生命蔵識」と対をなして「他己」の「ずい（無意識領域）」に「如来蔵識」が宿っている、ということになるのです。垢が付くとは、この如来蔵識に垢がついて仏さまの輝きが消えて行くのです。無明の闇をさまざまようになつて行くのです。

人間は、生まれたとき、未分化ながら、この無意識の二つの働きは統合されていますが、成長とともに、この二つは分化し、つねに再統合が必要になつて行きます。なのに、再統合の努力をしないで成長・発達し、自分の「できる」ことを増やして行きますと、だんだんと再統合ができなくなつて行き、意識水準では「人の心を感じるころ」が無くなつて行くのです。それが、この偈で言っています「汚れ」なのです。

では、再統合はどうすれば可能なのでしょう。そのためには、「こころを磨く」ことがあるのです。聖人の

教えを信じ、ひたすら毎日、磨かなければなりません。それは、毎日、ひたすら、瞑想・ヨーガ・読経、などをする事です。

その時、罪過がなくなり、「天の尊い処に至る」のです。それは、あの世ではなく、この世でそうなるのです。釈尊が生まれてすぐ言われたとされている「天上天下唯我独尊」の境地に至るのです。

(二三七) 汝の生涯は終わりに近づいた。汝は、闇魔王の近くにおもむいた。汝には、みちすがら休らう宿もなく、旅の資糧（かて）も存在しない。
(二三八) だから、自己のよりどころをつくれ。すみやかに努めよ。賢明であれ。汚れを払い、罪過（つみとが）がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。

この二つの偈は、前の二つと殆ど変わりません。二つとも、終わりの辺りが少しだけ違っています。

ここでは、(二三八)の最後の「汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。」についてだけ、解説しておきたいと思います。

釈尊は、人生は苦であるとされましたが、その苦の主

なものを生老病死の四苦と言い、あるいはそれに、怨憎会苦（おんぞうえく＝憎いものと会う苦しみ）、愛別離苦（あいべつりく＝愛するものと別れる苦しみ）、求不得苦（ぐふとつく＝欲しいものが得られない苦しみ）、五取蘊苦（ごしゅうんく＝あらゆる存在が苦であるということ）の四つを加えて八苦と言います。

偈にありました「生と老い」は、四苦にあげたはじめの二つです。ということは、この二つであらゆる苦しみを代表させていると考えられます。

そう考えますと、「汚れを払い、罪過（つみとが）がなければ、汝はもはや生と老いとに近づかないであろう。」ということとは、あらゆる苦しみが近づかないということになります。ということは、死をも克服できているということだと言えます。

なお、「生と老い」というときの「生」の苦しみですが、これは「生きている」「苦しみのことを言っているのではなく、自分の「生まれ」が、自分の思うとおりのものでなかったことの苦しみを言っているのです。

私も、少年期から青年期にかけて、なぜこんな家に、こんな自分で生まれなければならなかったのか、全く納得がいかず、ずっと悩み続けてきました。それに対する真の答えは、ヨーガの修行を十年足らず行った後、真言

密教の修行をするまでは、得られませんでした。修行によつて、「入我我入（即身成仏）」を体験したとき、はじめた答えが得られたのです。それは、自分が体験したことは、全てが因縁であったと実感するようになったのです。自分では、自分の意志で自分の人生を「はからつた」という思いをもっていました。それが、それも含めて全てが「成るべくして成つた」のだと実感できるようになったのです。そして、自分の過去の全てに、感謝することができるようになっていったのです。

かつて、『こころのとも』第一巻十月号に、次のような詩をのせました。

因縁という言葉の重みが／日増しになる

人は因縁のおかげで／生かされて生きている

ああわたしは／いま生きている

ただそれだけの／何と有り難いことよ

死を克服するとは、死にたいと思うことではありません。いま、生きていることが、ただそれだけで有り難いと思うことができる、ということなのです。生きる喜びが勝手に湧き出てくるということ。それは、死がまったく気にならなくなるといってもあるのです。

偈にありますように、汚れをはらい、自己のよりどころをつくるならば、こうした境地に達するのです。

後記

一、今年は、よく雨が降るように思います。讃岐でも、もう田植えが始まっていますが、池はどこも満水です。

二、春が終わり、夏となって（立夏は六日）、雨が降る度に雑草がよく伸びてきます。池の土手や畑のげしの草刈りを何度もしています。

三、畑の夏野菜も、ほとんど植えおわりました。ナス、カボチャ、トマト、キュウリ、里芋、さつま芋（一部のみ）、時なし大根、うずら豆、さやいんげん、人参、キヤベツ、ニラ、ねぎ、さとうきび、枝豆、ほうれん草、ふだんそうなどの菜っ葉類、などなど植えています。

四、サトウキビは、讃岐和三盆の原料になります。一畝（一アール）余り植えています。自給を離れて作っていません。結構、相場はよいそうです。将来、施設をした時の現金収入の一つになればと思い、地元の方に教えて頂いて、経験を積むためと思って作っています。なにしろ何年も荒らしてあった畑ですので、スギナがはえてきて、しょっちゅう草取りをしています。

五、ことしは、たばこを作っている方から、ご好意で、たばこの苗の定植後の保護に使う不織布のお古を頂き、いろいろな作物をトンネル栽培しています。病害虫の被害がかなり少ないように思えます。

六、いま、人権をめぐる問題を検討していますが、その中で憲法だけではなく、民主主義とは何なのか、政治とはなになのか、などについてもいろいろと、その関係の本を読んでいます。

七、もっとも気にかかる問題は、民主主義や政治を支える思想の中に、人間は理性が発達すれば、多くの人が話し合うことで、正しい判断や行為をすることができるようになるものだ、という考え方があることです。日本のことわざにもありますように、「三人寄れば、文殊の智慧」の通りに、社会も動くと考えている点です。それは、人間が、益々、灯明を失って無明に迷う道なのです。

月刊 こころのとも 第九卷 五月号 (通巻 一一号)	平成十年五月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（しょうせい）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

